月刊みんぱく
2021年
10月号
昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和3年10月1日発行 第45巻第10号通巻第529号
国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集 渋沢家と故郷の民具

みんぱくと渋沢家 飯田 卓
渋沢家と血洗島 井上 潤
みんぱく資料が語る「郷土」血洗島 佐藤 美弥
父祖の地からのコレクション 内田 幸彦

月刊みんぱく
2021年
10月号

目次

1 エッセイ　千字文
100年前の大波
樺山 紘一

特集
渋沢家と故郷の民具

2 **みんぱくと渋沢家**
飯田 卓

4 **渋沢家と血洗島**
井上 潤

6 **みんぱく資料が語る「郷土」血洗島**
佐藤 美弥

8 **父祖の地からのコレクション**
――アチックミューゼアムに残された血洗島・下手計収集資料
内田 幸彦

10 みんぱく回遊
民家模型の魅力をさぐる
寺村 裕史

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
植物治療運動の足跡を訪ねて
――スイスの養生の旅
鈴木 七美

16 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
やむにやまれぬ竹楊枝
樫永 真佐夫

18 シネ倶楽部 M
ヒマラヤで学ぶ生き方の原点
――「ブータン 山の教室」
池谷 和信

20 ことばの迷い道
永遠の愛を誓いますか？
佐田 陸

21 編集後記・次号の予告

表紙
埼玉県深谷市にある渋沢栄一の生家と栄一の銅像
（2020年、写真提供：PIXTA）

エッセイ 千字文

一〇〇年前の大波

樺山紘一

ほぼ一〇〇年前の一九二二年、ひとりのアメリカ人が実業家の渋沢栄一を訪ねてきて、熱弁をふるった。オスマン帝国内に居住するアルメニア人が、直前の第一次世界大戦以来、政府の迫害に苦しめられている。無数の生命が奪われ、居住地と寝食が危険にさらされ、難民となって民族の滅亡にも追いやられていると。

いまなお「アルメニア人迫害」問題として、論議の対象とされている一件である。同情心に震えた渋沢は、すぐさま救援委員会をたちあげ、救援基金のための募金運動の先頭にたった。難民をめぐる国際支援としては、日本として最初の活動となった。練達の渋沢にとっても、はじめての経験。「たとえ宗教が異なっても、人類として見殺しにする訳にはいきません」と訴えた。この運動は、たちどころに、大正時代の日本で反響をよび、短期間のうちに二万円の支援基金が集まり、国際機関をとおして現地へ届けられたという。時に、渋沢は八二歳。国際社会に乗り出すには遅かった。

けれども、にわかな国際化の時代の波を感じとっていたことはたしかなようだ。その前年の一九二一年、創設されたばかりの国際連盟では、鳴り物いりで設置された委任統治委員会に、日本から代表者が参画することになった。派遣されたのは、なんと直前まで貴族院書記官長を務めていた元官僚の民俗学者・柳田国男である。前後二回のジュネーヴ滞在のあいだ、柳田は不自由なフランス語で、困難な状況にある世界各地の旧植民地とその民族への関心を語ったようである。

その国際連盟にあって、事務次長に任じられ、なまなましい世界情勢を見守ったのは、農業経済学者の新渡戸稲造。世界組織の采配者という役務に臆することなく、普遍的価値と国益とをあわせ調整するとは、どれだけ困難な作業だったことか。

また、すでに国際スポーツ交流の場としての近代オリンピック運動の意義を強調して、みずから国際組織に身を投じていたのは、柔道家の嘉納治五郎である。オリンピックへの日本人の初参加は、一九一二年のことである。いずれにせよ、このころ突然にやってきたかのような国際社会の大波。どのような姿勢で、どんな手段をとってこの波に乗り、重要な構成員として役割を果たすことができるか。

熟練の国際人とはいいがたい当時の日本人だったが、熟慮と覚悟をもって、この大波を乗りこなしたようにみえる。一世紀の時を隔てて、いまあらためてその労苦をしのびつつ、あらたな行動の指針に想いをいたしてみたい。

プロフィール
1941年東京都生まれ。歴史学者。東京大学文学部卒業、同大学院をへて、1969年から京都大学人文科学研究所助手。1976年から東京大学文学部助教授、のち教授。その間、短期で国立民族学博物館客員教授。2001年から国立西洋美術館長。2005年から印刷博物館館長。2020年から渋沢栄一記念財団理事長。おもな著作は『ルネサンスと地中海』（中央公論社）、『歴史の歴史』（千倉書房）など。

特集 渋沢家と故郷の民具

今年、注目を集めている渋沢栄一。その孫である渋沢敬三は、昭和初期に栄一の生まれ故郷・血洗島で民具の収集をおこない、現在、みんぱくにはそのうちの約四〇点が収蔵されている。本特集では渋沢家とゆかりのある血洗島に焦点を当て、みんぱくの収蔵資料から見える当時の生活風景や敬三がかかわった民具収集について紹介する。

みんぱくと渋沢家

飯田卓
民博 学術資源研究開発センター

渋沢栄一と渋沢敬三

今年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公は、日本資本主義の父といわれる渋沢栄一（一八四〇～一九三一年）である。ドラマには、彼の故郷である武蔵国血洗島村（現埼玉県深谷市血洗島）がたびたび出てきて、筆者は親しみを感じてきた。なにしろ、藍玉（染料）の製造や養蚕といった商品生産に力を入れるこの村のようすは、現在みんぱくに保管されている同地収集の標本資料からも想像がつくからだ。実業家としての栄一のキャリアが藍の葉の買いつけと藍玉製造に始まることは、その自伝『雨夜譚』（岩波書店、一九八四年）にも活き活きと述べられている。

血洗島で集めた資料がみんぱくに保管されているのは、栄一の孫である渋沢敬三（一八九六～一九六三年）がコレクションの形成を主導したからである。敬三は、学生時代の友人たちと自然史標本や郷土玩具をもちよって品評し合った。一九二〇年代にはその定例会を「アチックミューゼアム」と名づけて次第に仲間を増やし、活動の力点を民具や民衆史へと移していった。民具ということばそのものが、敬三やその周囲による造語といわれている。彼らによる民具研究のようすは、みんぱくの展示図録『図説 大正昭和くらしの博物誌』（近藤雅樹編、河出書房新社、二〇〇一年）や『屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』（国立民族学博物館、二〇一三年）に詳しい。

1930年代のアチックミューゼアムの室内（提供：神奈川大学日本常民文化研究所、写4-1-7-2）

みんぱくと渋沢敬三

ただし、コレクションと敬三とを橋渡ししたのは、アチックミューゼアムだけではない。アチックミューゼアムの仲間とともに敬三が集めた資料は、一九三七年に日本民族学会（のちの日本民族学協会、現在の日本文化人類学会）に寄附され、そこで長らく敬三の庇護を受けて成長した。敬三は、資料を研究・展示するために東京府保谷村下保谷（現東京都西東京市下保谷）の土地と建物を寄附したのみならず、研究員を雇用するための経費も定期的に学会（協会）に寄附した。そして、没年までこの団体の理事、理事長、会長を歴任した。このあたりの事情は、『国立民族学博物館調査報告 一三九』（二〇一七年）などにより、少しずつ明らかにされてきている。

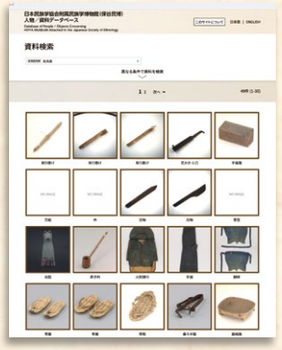
敬三は学会（協会）の重鎮を務めたが、けっして研究者の道を歩んだのではない。彼は経済史や漁業民俗についての著作を残し、日本農学賞を受賞したが、本業は銀行家だった。戦前は第一銀行取締役と日本銀行総裁を務め、日本の敗戦後は幣原喜重郎内閣のもとで大蔵大臣を務めた。GHQの占領政策にしたがって財閥解体に着手し、その矛先は自らの資産にもおよんだにもかかわらず、敗戦翌年（一九四六年）には公職追放の対象となった。

敗戦直後に引き受けた日本民族学協会会長兼理事長という重責を、敬三は一九四九年まで務めあげる。しばらくののち、一九五一年からは会長となり、在任のまま生涯を閉じた。附属博物館は、敬三が亡くなる前年、建物の老朽化を理由に閉鎖された。収蔵品は、国立の博物館が設立するまでという期限付きで文部省史料館（当時）に預けられ、のちに、日本万国博覧会跡地にできた博物館が引き取った。それがみんぱくである。

あたらしいデータベース

敬三が築きあげたコレクションを、みんぱくでは保谷民博コレクションとよんでいる。保谷にある学会（協会）附属の民族学博物館で収蔵・展示されていたからである。大阪にあるみんぱくが一九七五年に受け入れたこのコレクションの点数は、二万八〇〇〇点あまりとも二万一〇〇〇点あまりともいわれる。しかし、写真など異なるカテゴリーの資料を含んでいたり、受け入れ側のみんぱくで数えかたが変わったりしたため、現在判明している実際の点数は一万七〇〇〇点あまりである。これらは、みんぱくのホームページで公開されている「標本資料目録データベース」で閲覧できるが、他の資料から区別するのはむずかしい。

フォーラム型情報データベースのプロジェクトとして公開予定の「日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）人物／資料データベース」は、保谷民博コレクションの資料とそれを収集した人物についてのデータベースである。みんぱくが登録した資料だけでなく、みんぱく設立前に行方不明になった資料なども閲覧できる。これまでの研究の成果であるとともに、今後の研究の発展の基礎でもある。



上：「日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）人物／資料データベース」の画像一覧画面
左：衣冠用沓（くつ）。資料管理原簿に詳しい記述はないが、受け入れ時期などからみて、宮中儀礼で敬三自身が用いたと推測される（H0026797）

日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）人物／資料データベース
https://ifm.minpaku.ac.jp/hoya/

上：家内吉樽（詳細は8頁参照）
下：渋沢家四代。左から栄一、篤二、雅英、敬三（大正14年11月1日、提供：渋沢史料館）

渋沢家と血洗島

井上潤　渋沢史料館館長

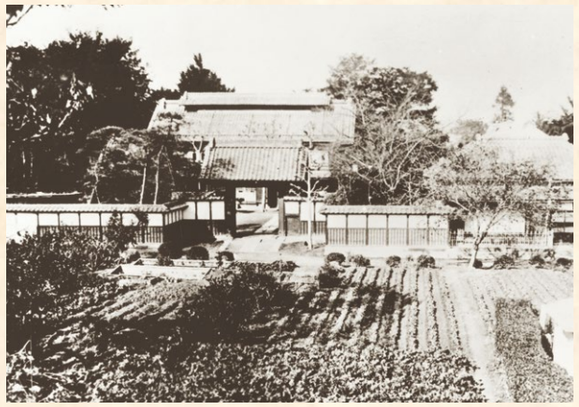
「血洗島？」。何とも奇妙な地名である。何かしら曰くのありそうなこの血洗島と渋沢家との関係は如何に……？　ここに探ってみることにする。

そもそも血洗島とは、アチックミューゼアム創設の大黒柱・渋沢敬三の祖父で近代日本社会の創造者とも称せられる渋沢栄一の生誕地である。栄一が天保一一（一八四〇）年二月一三日（旧暦）に生まれたのが、武蔵国榛沢郡血洗島村であった。

商売が盛んな村

北関東の農村地帯にある血洗島村は、家数に比べて安定した耕作地が少なかった。特に水田がほとんどできず、不安定ながらも畑地が中心であった。江戸時代の日本は「米社会」といわれるように、主たる税を米で納めていたが、血洗島村は岡部という小さな藩領にあり、この領内においては米がとれないので、米で納めることをせず、早くから「金納」というシステムがとられていた。つまり、近世の比較的早い時期から貨幣経済が浸透した地域だったのである。

この地域では、安定した耕作地が少なかったことから、農作だけでは生業が成り立たなかった。貨幣経済が早くから浸透していたなかで、商業や工業を営む家が多かったようである。渋沢の一族も、商売をするようになっていた。血洗島周辺の村々では「武州藍」という藍染めに使う藍の葉がよくとれたので、それを買い集めて加工し、染料となる藍玉を製造して、信州や上州の紺屋に売りに行く商売が盛んにおこなわれていた。渋沢家でも、栄一の父親の代から、この商売を本格的におこなうようになり、これがまた財を築くもとになっていった。



上：中の家全景（提供：渋沢史料館）
下：当時の取引帳簿である藍玉通（かよい）。「代 栄一郎」という記載から、父親に代わり栄一が集金にいった様子がうかがえる（提供：渋沢史料館）

また周辺を見渡すと、北に利根川が流れ、南に主要街道である中山道がとおっている。当時、物資の輸送は舟運が中心で、利根川でも盛んにおこなわれていた。血洗島村の北東に位置する中瀬というところには、船着場や問屋、蔵が建ち並び商業地として栄えた河岸があり、また、村の南をとおる中山道には深谷宿という大きな宿場があった。中瀬河岸があることや、寄居方面への分岐点であったこともあり、商業が極めて盛んで、近江の行商人が土着し、有力商人になった者もあったようである。まさに血洗島村周辺は、人や物、金が行き来し、集積がなされた交通および地域経済の要衝であって、「農村」と一括りにできない、ある意味で先進性を帯びた地域であった。

諏訪神社の獅子舞。奥に見学する栄一の姿が見える（右の狛犬の右隣り、大正9年9月、提供：渋沢史料館）

人材育成と栄一

渋沢家は、村のなかで常に由緒ある家として位置づけられる。血洗島では、今も、毎秋に「ささら舞」という獅子舞の祭礼がおこなわれている。村の鎮守・諏訪神社から出て、吉岡、福島、笠原、渋沢の氏神である四社廻りをする。この祭礼は、栄一もこよなく愛し、毎年のように見学に足を運んだものである。

もともと『新編武蔵風土記稿』等の地誌には、「血洗島村は五軒によって開かれた」旨の記述が見られる。そのうちの四軒を廻るのである。つまり、それぞれは、村のなかにおいて由緒ある家として位置づけられるのである。

最初は五軒からスタートした村も、時代を経るうちに家数も徐々に増えていった。渋沢家も栄一が生まれた家「中の家（ナカンチ）」（カタカナ表記は地元での呼称）では、代々「市郎右衛門」を名乗っていて、栄一の父親も名主見習いを勤め、名字帯刀を許された格の高い家柄であった。そこを中心に、「前の家（マエンチ）」「東の家（ヒガシンチ）」、「新屋敷（シンヤシキ）」「古新宅（フルシンタク）」と増えていったのである。

青淵図書館（提供：渋沢史料館）

栄一の晩年期、血洗島では、農村に近代文明を応用しようとする方針が打ち出され、折にふれて真の実際教育を施す公民教育を興すかなめがあると唱えられた。栄一も大いに賛同し、栄一の寄附で「青淵図書館」が設けられ、その図書館にて公民教育を施す機関公民学校が成ったということである。他の教育とあいまって実際に役立つ人をつくることを目指していた。

渋沢によるところもあり、人が育ち、人を育てる土地であったといえるだろう。

みんぱく資料が語る「郷土」血洗島

佐藤 美弥
埼玉県立歴史と民俗の博物館主任学芸員

渋沢栄一の故郷、血洗島の民具

みんぱくには、渋沢栄一の嫡孫渋沢敬三が開設したアチックミューゼアムにより血洗島から収集された民具が残る。その一部は、二〇一三年に敬三の没後五〇年を記念して開催された特別展「屋根裏部屋の博物館」が埼玉県立歴史と民俗の博物館（以下、埼玉歴民博）に巡回し、埼玉県に「里帰り」した。それら血洗島の民具から、どんなことが読みとれるだろうか。

近世後期の地誌『新編武蔵風土記稿』によれば、武蔵国榛沢郡血洗島村は利根川の南に天正年間（一六世紀終わりごろ）に開かれた。畑に水田が交じる農村で、幕末には若き栄一が商った藍の生産や養蚕が盛んだった。近代になり、一八八九年に周辺七村と合併、栄一が命名にかかわった八基村が誕生し、以後数度の合併を経て深谷市となっている。

藍の苗を移植しているところ（埼玉県羽生市、1985年、出典：『新編埼玉県史 別編1民俗1』、提供：埼玉県立歴史と民俗の博物館）

藍と蚕の農具

アチックミューゼアムに民具が収められた当時、血洗島は八基村の大字であり、地域の有力者や八基村青年団血洗島支部（以下、青年団）がそれらを採集した。青年団が一九三四年に採集したもののうち、農具では米や麦の生産に関するものほか、藍作や養蚕に関するものが目立つ。藍作関係のものには、苗を移植・定植する藍植鍬や藍玉の製造に使用する臼や杵が含まれる。藍植鍬は苗を扱うのに便利なように小ぶりの作りだ。埼玉歴民博では「アイッテンガ」（藍手鍬）という名称で同様の資料を収蔵する。

養蚕具では、蚕を育てるのに使う網や、エサとなる桑の葉を枝から扱きとる桑モギ器がある。これは鉄製の刃を交差させ、木製の台にとりつけたもの。埼玉歴民博収蔵の民具コレクション「北武蔵の農具」にも同型のものが多数含まれる、一九世紀終わりごろから広く使われたものだ。

これらの農具が収集された当時の血洗島でも藍作・養蚕が盛んだったかというと、そうではなかった。養蚕は戦後まで続いたが、藍作はインド藍、合成染料に押され、一八九六年を境に急激に衰退した。かわって東京、横浜市場向けの野菜作りがしだいに広がり、現在の深谷だいに広がり、現在の深谷の代名詞ともいえるネギの作付けも増加した。血洗島の農具は同時代の血洗島を表象するものというより、やや過去のそれだった。

桑モギ器（H0016894）

藍植鍬（H0016877）

生活と信仰の民具

生活用具のなかにモリテがある。これは竹製の柄杓で、柄をさしとおした円筒部分の半分に長い歯をかたどるもの。アチックミューゼアムの民具が寄贈された日本民族学協会附属民族学博物館の資料台帳『民具標本収蔵原簿』の備考欄には「ニボート盛に用ふ」とある。血洗島を含む埼玉県大里地域の冬場の郷土料理で、小麦粉をこねてうどんの三倍ほどの幅に切り、大鍋で野菜とともに醤油で味付けし煮込む「煮ぼうとう」を盛る道具だ。「ニボート」は栄一が帰郷のたびに味わう好物として知られていた。

信仰や民俗芸能に関するものを見ると、底抜け柄杓は『民具標本収蔵原簿』の備考欄に「島護産泰神社の産泰を安産と曲解したる当地方人の信仰」とあるように、榛沢郡の総鎮守といわれる島護産泰神社（さんたいさま）に「楽に子が抜けた」安産のお礼や願掛けのため納める。自家製のササラ笛は、血洗島の鎮守の諏訪神社に奉納される一人立ちの獅子三頭による獅子舞の曲を吹く横笛だ。花笠をかぶった役が竹で作る楽器のササラを演奏するので、獅子舞のことをたんに「ササラ」ともよぶ。若き栄一もササラを舞い、また後年まで毎年のように帰郷し楽しんだ。

上：煮ぼうとう（復元）
（出典：『いただきます～食の文化史～』、提供：埼玉県立歴史と民俗の博物館）
中：モリテ（H0016872）
下：ササラ笛（H0016878）

民具が語る「郷土」への意識

青年団の全国団体、大日本連合青年団は一九三四年に団成立一〇周年を記念して郷土研究や資料陳列所を設立し、全国の青年団に郷土資料収集を呼びかけた。その対象には住居、衣服などのほか、「郷土の誇り」「郷土の行事」といった項目が含まれた。そうした郷土研究には、華やかな都市の文化が若者を惹きつける他方で、恐慌により疲弊した農村の「更生」が叫ばれた時代に、青年団のよって立つ「郷土」を再認識させようとする意図があった。

八基村青年団でも、一九三一年に死去した栄一を追悼する団報を刊行（一九三二年）し、また同じころ実施された耕地整理により村の景観が一変するなか、栄一の雅号「青淵」の由来といわれた淵に「青淵由来之跡」碑を建てる（一九三七年）といった顕彰運動をおこなうなど、「郷土」にかかわる事業を進めた。

往時の特産物や村の誇りである栄一を連想させる血洗島の民具は、そうした同時代における青年団の「郷土」への意識を語っているように思われる。

八基村青年団も参加した、敬三邸での八基村勢調査報告座談会の記念写真（1931年、出典：『八基村勢調査書』、提供：埼玉県立図書館）

父祖の地からのコレクション
――アチックミューゼアムに残された血洗島・下手計収集資料

内田幸彦　埼玉県教育局文化資源課

渋沢敬三と父祖の地・血洗島

渋沢敬三の旅行を記録した「旅譜と片影」（『澁澤敬三著作集 第四巻』、平凡社、一九九三年）には、計一三回の父祖の地である血洗島訪問が記されている。初回は大正一四（一九二五）年九月に、祖父の栄一と叔母の穂積歌子に同行したもので、このときは栄一の生家である中の家に一泊している。この日は鎮守である諏訪神社の例大祭で、栄一にとって恒例の里帰りであった。その後も敬三は度々諏訪神社の例大祭に合わせて血洗島を訪問し、血洗島の人びとと交流を重ねている。

ここでは、こうした父祖の地との繋がりが生んだ、小さいけれども先駆的な民具コレクションについて紹介したい。

アチックミューゼアムの血洗島・下手計収集資料

敬三とその研究仲間によって作られたアチックミューゼアムは、その活動を通じて二万点を超える一大コレクションを構築した。

そのなかに、血洗島とその隣村の下手計から収集された、六八件の民具が含まれている。ちなみに下手計は、栄一の従兄弟であり、栄一に『論語』などを教えた最初の学問の師でもあり、後に富岡製糸場の初代場長となった尾高惇忠の家が所在した集落としても知られている地である。

収集は四回にわけておこなわれた。最初は昭和四（一九二九）年、敬三百らが血洗島で「削り掛け」三点を収集している。次いで昭和五（一九三〇）年には、血洗島の有力者で後に県会議員を務めた吉岡重三が藍作関係資料六点、さらに昭和九（一九三四）年に八基村青年団血洗島支部が農具をはじめとする生活全般にわたる資料四二点、最後は昭和一二（一九三七）年に惇忠の娘婿である定四郎が機織関係資料二五点を収集、寄贈している。

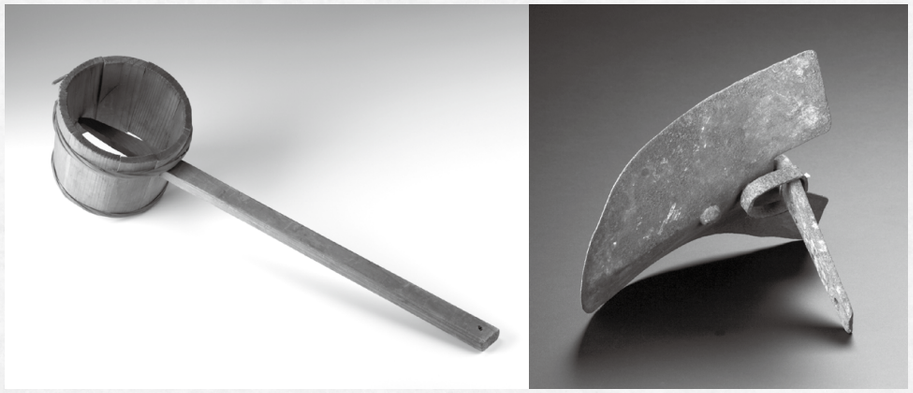
尾高定四郎がアチックミューゼアムに寄贈した家内吉樽。尾高家（当主）を示す「油礒」の文字が見える（左からH0019481、H0019480）

血洗島・下手計収集資料の特徴は、全体の点数が少ない割には、その範囲が灯火用具や調理用具、履物など衣食住にかかわるもの、農具や染織用具など生業にかかわるもの、絵馬や削り掛け、家内吉樽（柳樽）など儀礼や信仰にかかわるものと、一見ランダムに集められたかと思うほど多岐にわたっていることである。

小さなコレクションがもつ総合性

アチックミューゼアムのコレクションといえば、国の重要有形民俗文化財となっている「おしらさまコレクション」「背負運搬具コレクション」、あるいはレントゲンによる構造分析から文献・絵画資料まで、あらゆる研究手法を駆使した民具研究の金字塔である『所謂足半に就いて（豫報）』（アチックミューゼアム、一九三六年）を生み出した膨大なアシナカのコレクションがよく知られる。これらにはいずれも広域から同一種類の民具を数多く集めたものという共通点がある。そのようなかにあって血洗島・下手計の収集資料は、極めて狭い地理的範囲から、生活のさまざまな側面にかかわるものが広範に集められているという点で特異である。

敬三が収集した削り掛け（左からH0014990、H0014991、H0014992）


八基村青年団血洗島支部が収集した底抜け柄杓（左：H0016886）とマネ引（右：H0016874）。底抜け柄杓は、深谷市・島護産泰神社の安産祈願で使用されるもの。マネ引は水田二毛作による麦栽培の不整地蒔きに使用されるもの

コレクションに隠された意図

じつは血洗島・下手計収集資料の収集時期は、アチックミューゼアムが民具の定義を固め、その収集と調査の体制の拡大を目指した時期にぴたりと重なる。

この時期、アチックミューゼアムは急務である民具収集の全国的拡大を図るため、『蒐集物目安』（アチックミューゼアム、一九三〇年）、『民具蒐集調査要目』（アチックミューゼアム、一九三六年）というふたつの収集マニュアルを作成している。じつは、一見、無造作に集められたかに見える血洗島・下手計収集資料の内容は、すべて『蒐集物目安』が示す五分類に当てはまっている。敬三が収集した削り掛けを除けば、これは素人による総合的な民具収集の嚆矢といえるものなのである。

おわりに

残念ながらアチックミューゼアムでは、マニュアルが目指した広範な担い手による民具収集の拡大という夢が花開くことはなかった。だが、アチックミューゼアムで育った祝宮静、宮本馨太郎らによって、戦後の文化財行政のなかで『民具蒐集調査要目』は「重要民俗資料指定基準」における「文化庁分類」として発展的に引き継がれることとなった。

昭和中期以降に全国で設立された地域博物館や歴史民俗資料館の多くが、「文化庁分類」を参照して、今日も民俗資料のコレクション形成に励んでいる。その担い手の中心は埋蔵文化財の専門家などであり、民俗・民具研究者は決して多くはない。

非専門家が、限定された地理的範囲において、マニュアルに基づいて生活全般にわたる有形民俗資料を収集するというこのような方法は、敬三が父祖の地で始めたものなのである。

『民具蒐集調査要目』（C921389715、本館所蔵）

みんぱく回遊

民家模型の魅力をさぐる

寺村裕史
民博 学術資源研究開発センター

「模型」と聞くと、乗り物やロボットなどのプラモデルを想像する人が多いのではないだろうか。あるいは、鉄道模型のようなジオラマを思い浮かべる人もいるかもしれない。みんぱくの展示場には、縮尺が一〇分の一というサイズで製作された日本や世界の「民家模型」が七点展示されている。

模型が資料？と不思議に思うかもしれないが、製作は緻密な現地調査に基づいており、学術資料としても価値の高いれっきとした標本資料である。もちろん標本番号も付されている。ここでは、展示場に陳列された民家模型を紹介しながら、その魅力をさぐってみたい。

展示場の民家模型

朝鮮半島の文化展示場にある、一九八三年に製作された「済州島の民家」からは、屋敷地を取り囲む垣や、建物の壁にたくさんの石が使われている様子がよくわかる。その石ひとつひとつの形もみな異なり、手が込んでいることに驚かされる。また庭の畑や、その傍に干されている洗濯物なども忠実に再現されており、まるで本物と見まがうほどの出来である。さらに外観だけでなく、民家のなかの間取りも再現されているので、民家模型の横に備えつけられた懐中電灯を使って民家内部を照らしながら覗いてみるのも楽しい。

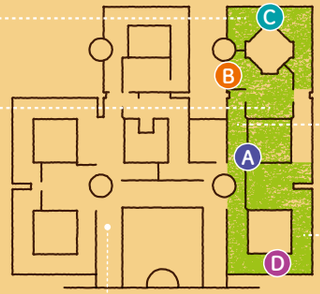
中国地域の文化展示場の「四合院」は、住居の精緻さはもちろんだが、周囲に植えられた樹木や花などの植物のリアルさにも目を奪われる。カメラでズームアップして写真を撮れば、まるで本物と錯覚してしまうような風景が切り取られ、実際に自分が現地に立ったかのような気分になる。もちろん、そこはわたしの感想であり、そう表現したくなるほど建物以外の細部にも気配りがなされた模型だということである。

日本の文化展示場にある「合掌造り」は、富山県南砺市の五箇山の合掌造りの民家がモデルである。一九七五年当時の秋の情景をそのまま再現したものであり、側面に回り込めば、洗濯機や洗剤、酒瓶など生活感にあふれるものも目にとまる。また、わざと未完成のままにしている茅葺き屋根も見どころである。屋根の三分の一ほどは茅葺きがなされておらず、木材などの骨組みが見えるようになっている。こうした工夫ができるのは、模型ならではの利点であろう。なお、この模型自体は一九七七年度受け入れの標本資料だが、二〇年近く後の一九九五年にはそのオリジナルである本物の民家が「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として、ユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されたことも特筆しておきたい。

Ⓐ 済州島の民家（模型縮尺1/10）（韓国、H0105533）
民家模型の横に民家の内部を覗くための懐中電灯が備えつけてある

Ⓒ タシュケントの民家（模型縮尺1/10）（ウズベキスタン、H0105532）

「タシュケントの民家」のモデルとなった家の現在の様子（2019年）



Ⓑ 四合院（模型縮尺1/10）（中国、H0108501）の部分拡大（左）と全景（右）

Ⓓ 合掌造り（模型縮尺1/10）（日本、H0009514）

Hからはじまる番号は標本番号です。

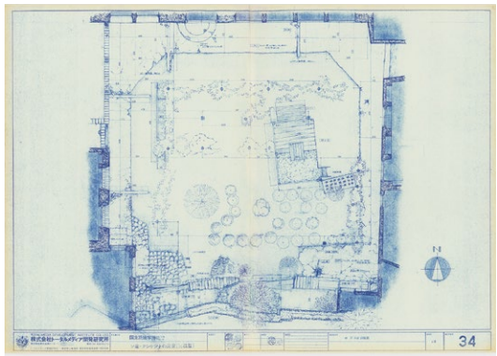
過去と現在をつなぐ資料

わたしの調査地との関連では、中央・北アジア展示場に一九八三年に製作されたウズベク人の民家の模型「タシュケントの民家」が展示されている。この模型は、当時の旧ソビエト連邦ウズベク共和国の首都タシュケントに実際に存在した民家がモデルになっている。模型製作を請け負った株式会社トータルメディア開発研究所が作成した家屋の青焼き図面も、みんぱくに残されている。

青焼き図面には、民家の間取りの計測だけではなく、屋根や窓枠、中庭の涼み台、ブドウ棚や植えられている果樹に至るまで、詳細なスケッチも記されている。こうした精緻な設計図をもとに製作された民家模型は、三〇年以上前の民家や人びとの暮らしの様子を、そっくりそのまま現代まで伝える役割も担っており、歴史的な資料としても貴重なものといえるだろう。

また民家模型は、単に過去の情報を伝えるだけではない。二〇一三年には、みんぱくの研究者による調査のほかさまざまな方の協力を得て、モデルとなった民家とそこに暮らしていた家族のその後の状況が明らかとなった。そして二〇一九年にはわたし自身がウズベキスタンに渡航し、現在の暮らしの様子や民家の現状を、映像撮影・記録させてもらうことになった。まさに、みんぱくの標本資料が取り持つ「縁」であり、現代とも密接につながっているのである。

今回紹介したこれらの模型に共通するのは、民家とそこに暮らす人びとの「ある日・ある時間」の日常の様子を切り取って、精確に一〇分の一の模型を作り上げたという点である。たかが模型と侮るなかれ、調査に基づいて図面を作成し、当時の人びとの暮らしの様子が目に浮かぶよう細部にまでこだわって仕上げられた学術的な標本資料なのである。「ある日・ある時間」を再現した民家模型からは、モノ単体の資料とは違った発見が得られるだろう。



タシュケントの民家（模型縮尺1/10）の青焼き図面
（作成：株式会社トータルメディア開発研究所）

INFORMATION みんぱくインフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第みんぱくホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

特別展

「ユニバーサル・ミュージアム ―さわる！“触”の大博覧会」

会期　11月30日(火)まで
会場　特別展示館

■関連イベント
ワークショップ
「『さわる』をデザインする ―ポップアップ本の魅せ方」

能動的にさわる行為によって、新たな発見が得られる体験を共有しましょう。特別展示場の「さわる絵本」をさわって観察した後、それらとは異なるポップアップ絵本ならではの魅力、「さわって作る」仕掛けを紹介します。オリジナルのポップアップ作品も作ります。

日時　10月31日(日)
　①10時30分～12時30分
　②14時～16時
会場　特別展示館地下休憩所
　　特別展示場
定員　各回10名
講師　桑田知明(デザイナー)
　　広瀬浩二郎(本館 准教授)
対象　小学3年生以上
※要事前申込、先着順、参加無料(大学生、一般の参加者は要特別展示観覧券)

【申込期間】
10月14日(木)10時受付開始
申込フォームまたは往復はがきにて。1通につき2名の応募まで。
イベント予約サイトはこちら
https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/

みんぱく映画会関連企画上映会
「そして瞽女はいなくなった ―ドキュメンタリーで辿る盲目の女性旅芸人の実像」

1970年代に制作されたドキュメンタリー映像をみながら、瞽女(ごぜ)文化について深く考え、語り合います。

日時　11月7日(日)11時～12時30分(10時30分開場)
会場　本館第4セミナー室
定員　25名
解説　斎藤弘美(「瞽女ミュージアム高田」顧問)
司会　広瀬浩二郎(本館 准教授)
※要事前申込、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※オンライン(ライブ配信)はございません。

【申込期間】
10月8日(金)9時受付開始
イベント予約サイトはこちら
https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/

雁木(がんぎ)のある町中を歩く

研究公演
「身体で聴く『土の音』 ―触れて打つ、揺らして拡げる」

ライブ演奏、即興演奏の迫力を通じて、全身で音を味わう空間を創出します。「音は耳だけで聞くものではない」という事実を確かめてみましょう。翌日14日(日)に関連ワークショップ「音にさわる―地球の鳴らし方」も開催します。

日時　11月13日(土)
　13時30分～15時15分
　(13時開場)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
解説　渡辺泰幸(造形作家)
　　永田砂知子(打楽器奏者)
出演　広瀬浩二郎(本館 准教授)
司会　広瀬浩二郎(本館 准教授)
※要事前申込、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※手話通訳あり

【申込期間】
10月4日(月)9時～11月5日(金)17時
イベント予約サイトはこちら
https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/

■特別展会期中の毎週金曜日にタッチツアー「あの手この手で特別展を楽しむ」(講師 広瀬浩二郎)を開催します。

企画展
「躍動するインド世界の布」

会期　10月28日(木)～2022年1月25日(火)
会場　本館企画展示場

■関連イベント
クロストーク
「布と空間デザイン ―インドの躍動感を伝える」

展示設計GENETOと企画展メンバーによる展示つくりの舞台裏を紹介します。

日時　11月13日(土)13時30分～15時
開催方法　オンライン(ライブ配信)(定員30名)
登壇者
山中コージ・山下麻子(合同会社GENETO GROUP)
五十嵐理奈(福岡アジア美術館 学芸員)
上羽陽子(本館 准教授)
小関万緒(本館 企画課標本資料係職員)
司会　金谷美和(国際ファッション専門職大学 准教授)
※要事前申込、先着順、参加無料

【申込期間】
10月4日(月)10時～11月5日(金)16時
イベント予約サイトはこちら
https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/

公開講演会
「流動化する家族のかたち ―少子高齢社会を文化人類学から考える」

ヨーロッパの農村や南アジアの都市で、少子化や高齢化に直面している家族のようすをお話しし、現代家族のかたちが流動化しつつあることについて考えます。

日時　11月12日(金)
　18時30分～20時40分
　(17時30分開場)
会場　日経ホール(東京)
定員　300名
講演　森明子(本館 教授)
　　松尾瑞穂(本館 准教授)
コメント　大門正克(早稲田大学教育・総合科学学術院 特任教授)
パネルディスカッション
　森明子×松尾瑞穂×大門正克
主催　国立民族学博物館
　　日本経済新聞社
※要事前申込、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。
※手話通訳あり

お問い合わせ先
本館 研究協力課 研究協力係
06-6878-8209

巡回展
「ビーズ アイヌモシリから世界へ」

会期　10月2日(土)～12月5日(日)
　※当初の会期から変更になりました。
会場　国立アイヌ民族博物館
　　特別展示室
主催　国立アイヌ民族博物館
　　国立民族学博物館
　　公益財団法人千里文化財団

みんぱくゼミナール

参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
・要事前申込、先着順、参加無料
イベント予約サイトはこちら
https://www.minpaku.ac.jp/event/lecture/seminar
・当日参加申込あり(会場参加のみ、定員30名)

第514回
10月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
【特別展「ユニバーサル・ミュージアム ―さわる！“触”の大博覧会」関連】
ユニバーサル・ミュージアムとは何か ―暗闇で「野生の勘」を取り戻せ
講師　大石徹(芦屋大学 教授)
　　黒澤浩(南山大学 教授)
　　篠原聰(東海大学 准教授)
　　広瀬浩二郎(本館 准教授)

【申込期間】
■一般受付　10月13日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第515回
11月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
産後三・七日間の変化 ―韓国の伝統慣習から産後ケア施設まで
講師　諸昭喜(本館 助教)
出産をめぐる儀礼や習慣は文化によって多様です。韓国では産後の母親と新生児に対してどのようなタブーや規範、儀礼が存在したか、そして、現代の産後ケアまで紹介します。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
(定員30名、会場参加対象)
10月11日(月)～15日(金)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付　10月18日(月)～11月17日(水)

産後の食事（ソウル、2016年）

みんぱくウィークエンド・サロン ―研究者と話そう

会場　本館第5セミナー室
※申込不要(当日先着順、定員42名)、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんぱくの展示資料」についてわかりやすくお話しします。

10月24日(日) 14時30分～15時(14時開場)
居庸関の雲台 ―万里の長城のもう一つの顔
話者　韓敏(本館 教授)

刊行物紹介
■西尾哲夫、東長靖 編著
『中東・イスラーム世界への30の扉』
ミネルヴァ書房　2,970円(税込)

中東・イスラームは日本から遠い別世界なのだろうか？「歴史」「宗教・社会」「経済・産業」「政治」「文化・精神」に関する30のトピックから現代中東・イスラーム世界をひもとく。日本と“世界”の見え方が変わる一冊。

各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会
要事前申込、先着順。
詳細は友の会ホームページをご確認ください。

第517回　10月2日(土)13時30分～14時40分
【特別展「ユニバーサル・ミュージアム ―さわる！“触”の大博覧会」関連】
さわる名画ができるまで ―その多様性と可能性
講師　辰巳明久(京都市立芸術大学 教授)
　　京都市立芸術大学の学生有志
　　広瀬浩二郎(本館 准教授)
京都市立芸術大学では、ビジュアル・デザイン専攻3年生の進級制作課題として、「絵画の立体化」に取り組んでいます。これまでにも視覚障害教育・福祉の文脈で「さわる絵画」が作られてきましたが、芸大生の「さわる絵画」は単なる視覚から触覚への置換ではありません。視覚芸術の再解釈、名画の再創造にトライした学生たちに、制作の裏話を紹介してもらいます。

参加形式
オンライン(ライブ配信)(定員100名)
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/517tomo/

第518回　11月6日(土)13時30分～14時40分
カフィル・カラ遺跡の食糧庫跡 ―発掘調査成果から考える「食」の過去と現在
講師　寺村裕史(本館 准教授)
ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡では、2017年度までの調査でゾロアスター教関連の木彫り板絵が発見されましたが、その後の発掘で食糧庫と考えられる別の部屋が見つかりました。今回の講演では食糧庫跡の発掘成果を紹介しつつ、出土した遺物(炭化した穀物やクルミ、ニンニクなど)と現在の食べ物を比較しながら、オアシス都市での「食」の過去と現在について考えます。

参加形式
①第5セミナー室(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/518tomo/

みんぱく友の会オンラインレクチャー
みんぱく研究者によるミニレクチャー動画を、友の会ホームページ内で公開しています。
公開ページ
https://www.senri-f.or.jp/category/events/online/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

植物治療運動の足跡を訪ねて
――スイスの養生の旅

鈴木（すずき） 七美（ななみ）
民博 グローバル現象研究部

モーリス・メッセゲの養生術

一九九七年、わたしは、モーリス・メッセゲの養生法を体験した。わたしが訪ねたのは、スイスのクラン＝モンタナの植物治療所である。

メッセゲは、一九二一年にフランスのガスコーニュ地方に生まれた民間治療者である。彼は、メッセゲ家に数百年前から伝わる「植物のバイブル」を頼りに自生する薬草を自分に試し、また、民間療法者で水脈占者でもあった父親から薬草の採集のしかたや用法を学んだ。しかし、医師免許をもっていないため裁判も経験した。正規の医者のみが治療や助産を手がけるようになった一九世紀前半の米国で、一人の農夫がはじめた植物治療運動を追ってきたわたしにとって、メッセゲの療法は現代に伝わるオルタナティブメディスン（代替医療）として興味深かったのである。

植物治療所の朝食（クラン＝モンタナ、1997年）

スイスではモーリス・メッセゲの療法は、一般医とホメオパシーの医師が常駐するセンターで適用されている。

ホメオパシーとは、「類似のものは類似のものによって治される」という原則に基づく代替医療の一種である。

まずは医師から問診を受け、次にリフレクソロジーの施術を受けた。足指の付け根や足の裏全体を眺めて心と身体のバランスを見極め、ツボを押して身体に異常がないか診断する。施術者オリビエによれば、この施術は、「健康の窓」と「病気の窓」のうち、前者をのぞき込み、人びとが自分の生活を振り返る手伝いをするという。

この後はスケジュールにしたがって、ハーブ浴や食事をする。足浴は朝、手浴は夕方、わたしのために選ばれた数種類のハーブの成分を浸出させた液体に手足をつける。わたしに使用するハーブはキヅタ、ハマムギ、イラクサ、ローズマリーであり、リラックスさせ免疫力や活力を高める効果があるという。キャベツの千切りと卵の白身を混ぜた湿布は、週四回肝臓のあたりに二時間以上つける。臭いとひんやりした感じが馴染（なじ）めないが、手足浴と並びこれこそが、メッセゲ家のハーブ治療の伝統を受け継いでいるという。

食事は、アルプスの山々を見晴らすレストランでとる。野菜と魚のコースだが、味付けはなされておらず、どうしても必要なら、岩塩を溶かしたハーブ液の瓶から一滴ずつ慎重に入れる。食材の味がこれほど豊かで、また塩も強い味であることに気がついたのは、このときが初めてである。黙食であることを忘れるほどに、味と口当たりに集中し、アルコールもコーヒーもなしの食事に満足した。朝食は部屋でとるが、すったリンゴやふすま入りのパンのほか、メッセゲの朝食の特徴である一かけ分を刻んだニンニクを食べる。

こうして、触覚・味覚に集中する時間を過ごしたあとは、経験したことがないほど身体が軽やかに感じられた。

モーリス・メッセゲの植物治療所のあるホテル（クラン＝モンタナ、1997年）

助産師オッティリアと筆者（右）
（アッペンツェル、1997年）

各地の養生を体験してみました

アッペンツェルの日々の養生

この体験を、スイス北東部のアッペンツェルの知人たちに話すと、湿布以外は自分たちの日常的な養生法と違（たが）わない、と口々に感想を述べた。

そのうちのひとりオッティリアが、隣人のモニカとわたしを自宅へランチに招いてくれた。オッティリアは助産師であり、代替医療の実践者でもある。一四歳でメイドとして働き始め、二一歳になってから助産師養成学校に通った彼女は、出産の医療化に危惧を覚え、その後六〇年近くも自宅で助産師の仕事を続けてきた。オッティリアのもとに来る産婦たちは、彼女の家に滞在し、庭で一緒に野菜を育て、その野菜を調味料なしに味わいながら、安産を目指している。モニカは、航空会社で働き、旅の多い生活をしてきたが、「どんな生活をしてゆくのか考え、それを選んでいる」のがアッペンツェルの人びとの暮らし方であると考え、季節の行事には熱心に参加する。父親から教えてもらった、山奥で暮らす人びとが自分たちや家畜の健康を守り癒す養生の教えを今も大切にしている。

野菜の柔らかい味が広がる食事の後、わたしたちはオッティリアの家を出て、彼女の運転する車で、山の中腹にあるトイフェンという町の「ドクター・フォーゲルの診療所」に出かけた。フォーゲルは、彼のホメオパシーの施術にもっとも重要な植物であるヤグルマギクの栽培に適したこの地に魅せられ、ドイツから移り住み、診療所と薬草植物園を設けた。ここには健康や養生に関する小さな展示もある。ここでわたしたちは太陽のもとで庭のハーブをかき分けながら、思い切り駆け回ったのだった。

夏の終わりに山から下りてくる牛と牛飼いたち
（アッペンツェル、1999年）

考えてみると、わたしにとっての養生は、誰かから聞かせられ見せられ、驚き、そして誰かに伝える流れのなかにあるようだ。静かに目の前のことに集中することも、また、各地に伝わる養生の物語を語り合い賑（にぎ）やかにともに味わうことも、いつもリフレッシュの瞬間を与えてくれたのである。

やむにやまれぬ竹楊枝

樫永 真佐夫（かしなが まさお）
民博 超域フィールド科学研究部

わたしが調査していたベトナムの黒タイの村では、バスケタリーも楊枝も竹からつくられていた。バスケタリーと楊枝。面（もしくは立体）と線という対照的なふたつは、どのようにかかわり合っているのだろうか。

ミンさんの後ろ姿

こんな話から始めたい。

ラオス国境に近いベトナム北部の山あいにある、黒タイとよばれる人たちの村にいた一九九七年のある朝のことだ。町に出たわたしは、一軒の麺屋で、客たちの朝食の後片付けもすんだ店主Mとだらだらしゃべっていた。そのとき、店頭に腰を下ろしてぼんやり往来を眺めているMの奥さんごしに、一人の白髪の男性が足をとめるのが見えた。

村のミンさんだ。彼は肩掛けカバンから手作りの竹楊枝（たけようじ）の束を取りだしながら、彼女にちかづこうとした。すると、客ではないと確信した彼女はすぐさま立ち上がり、眉間にしわを寄せて大きな声で「いらないよ」と語気強くベトナム語で言い放ち、追い払うしぐさまでした。

無言で踵（きびす）を返すミンさん。だが一瞬、暗い店の奥にいたわたしとたまたま目があった。慚愧（ざんき）に堪えないと言いたげな、情けない、かなしい表情が彼の顔に浮かんだ。すごすごと立ち去る彼の後ろ姿を、わたしは忘れることができない。

上：竹楊枝をくわえた男性（右から3人目）と卓上の竹楊枝。自分で裂いて適当な太さにして用いる
下：ほぼ竹でつくられた露台。その上にある敷物、カゴに加え、家壁もバスケタリー
（ディエンビエン省、1998年）

村のバスケタリーづくり

村の男性たちは五〇歳もすぎると、田畑の耕作、たきぎ取り、建築などの労働から引退し、菜園での野菜づくり、孫の世話、バスケタリーづくりなどをして、家の周りですごすようになる。つまりカゴや敷物や魚籠（びく）などバスケタリーをつくるのはおもに高齢者の役割だった。だから村のバスケタリーづくりを思い出そうとすると、亡くなった人の顔ばかりが頭に浮かぶ。ミンさんも一〇年以上前に亡くなった。

彼は高床の家のなかか露台で、いつもバスケタリーをつくっていた。わたしの訪問に気づくと、少しれいのある笑みを浮かべ、だが手は独立した機械のように動き続けていたものだ。

わたしは彼と会話したことがない。彼に出会う以前に、彼の耳は聞こえなくなっていたからだ。バスケタリーづくりに専念していたのも、そのことと無関係ではないだろう。だからMの奥さんにじゃけんに対応されたときも、ことばは聞こえなかったはずだ。いや、聞こえていたとしてもベトナム語はわからない。彼の世代だと、学校にも兵隊にも行かなかった少数民族にベトナム語を学ぶ機会はなかったのだ。

いっぽうで、町で暮らしている人の大半がキン族、つまりベトナムの多数民族だ。Mの家族も例にもれない。一九六〇年代に、海岸部の過剰な人口を減らすという政策上の要請に応じて、移住してきたのだ。

ベトナム人は食後に必ず楊枝を使うからMの店でも竹楊枝は必需品だ。だが、もしMの奥さんが買うつもりだったとしても、ミンさんに値段交渉はできなかっただろう。耳が聞こえないとか、ベトナム語がわからないとかの理由ではない。町でそういうやりとりをする際、主導権はキン族の側にあったからだ。彼はさしだされるなけなしのカネを受け取るしかない。当時キン族と少数民族のあいだには、それほど露骨な不均衡があった。

上：自宅で孫たちに囲まれ、カゴの底を組んでいるミンさん
下：竹へぎをつくる。細い繊維状の削りカスは燃料にする
（ディエンビエン省、1999年）

バスケタリーは竹へぎから

黒タイの村には、手製のバスケタリーがあふれていた。米を運ぶカゴ、摘んだ野菜や野草を入れるカゴ、ニワトリやアヒルを入れるカゴ、野菜洗いカゴ、床の上の敷物、座椅子、食卓、脱穀するときの敷物、魚籠、つづら、ザル、床、柵、家壁など、全部そうだ。

バスケタリーづくりは、一にも二にも竹へぎづくりからだ。刀で竹を割り、裂いて、何十も何百もつくっておく。竹はあますところなく消費され、節の部分はコップ、容器、ひしゃくなどになる。だが、一部が残ってしまうことがある。そんなやむにやまれぬあまりが、細く割り裂かれ、削られて竹楊枝になるのだ。

だが今では黒タイの村でバスケタリーをつくる人は減り、どの家にもプラスチック製品があふれている。ゆたかさと引き換えに、村から古いバスケタリーも染織物もどんどんなくなった。そんな変化を目の当たりにするうち、町の人でさえ、村の手仕事を文化の遅れた人たちの貧乏な営みとは蔑（さげす）まなくなり、伝統として尊重するようになった。

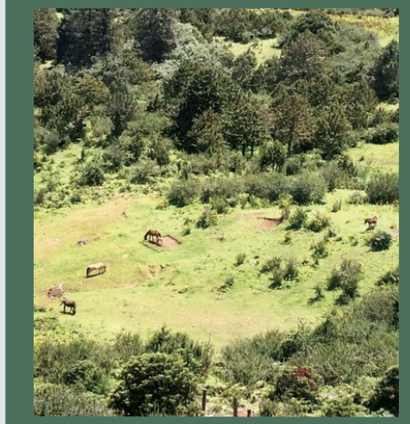
最初の話に戻ろう。

二〇年以上前のあの日、ミンさんは、一束あたり日本円にして五円程度の現金を得るために、一時間以上歩いて竹楊枝を町に売りに来たのであった。あれは彼が割り、裂き、削ってきたやむにやまれぬ心の束だったかと、今にして思う。

シネ倶楽部M

ヒマラヤで学ぶ生き方の原点

池谷（いけや） 和信（かずのぶ）
民博 人類文明誌研究部


山の放牧地（標高4000メートル、2019年、筆者撮影）

上：映画の舞台ルナナ村（標高4800メートル）
左：山の学校の子どもたち
（提供：株式会社ドマ）

「ブータン 山の教室」

原題：Lunana A YAK IN THE CLASSROOM
2019年／ブータン／ゾンカ語、英語／110分／2021年12月3日よりDVD＆BDあり
監督：パオ・チョニン・ドルジ
出演：シェラップ・ドルジ、ウゲン・ノルブ・ヘンドゥップほか

首都ティンプーの市街地（標高2500メートル、2019年、筆者撮影）

二年前にブータンを訪れる機会があった。面積が九州ぐらいのヒマラヤの山麓に位置する小さな国だ。首都のティンプーは、標高二五〇〇メートルほどの谷沿いに家屋が密集する都市である。そこは、野菜からチーズまで生活に必要なものは何でもそろう場所である。しかし、国土の大部分が山地からなるこの国では、車や徒歩を組み合わせて標高四〇〇〇メートル近いところまで行くと森林限界を超えて草原に出会うことになる。

わたしは、山の上で牛の群れとともにチーズづくりをするキャンプを訪問した。ここでのチーズは、週に一度、町に運ばれていると聞いた。しかしながら、ブータンの地図で見つけていたさらに奥地に位置する秘境が気になっていた。中国との国境に近く氷河にも近接する、チベット文化を代表する家畜であるヤクとともに生きる村である。

ティンプーの市場でチーズを売る女性（2019年、筆者撮影）

ブータン人の製作した映画

映画の舞台は、車で到達できる村から徒歩で八日もかかる標高四八〇〇メートルのルナナ村である。人口は五六人。ヤク飼いの多い村でもある。この映画の主人公は、首都に暮らす都会育ちの青年だ。オーストラリアに移住してミュージシャンになることを夢見る主人公は、ティンプーから村の学校に数カ月、教師として赴任することになった。その途中、ラバに荷物を運ばせて村人と歩いていく。そして、人口わずか三名の村に立ち寄る。背景の植生は、まだ森である。その後、森林がなくなり、白い雪で覆われた標高七〇〇〇メートル級の山並みが見えてきた。ルナナ村の人びとは皆、歓迎してくれる。

しかしながら、当初、村の暮らしは彼にとっては過酷であった。電気がない。紙も貴重である。暖をとるために燃料とするヤクの糞（ふん）拾いが欠かせない。学校には黒板がない。文字や数字を壁に書くことから始める。一方で、子どもたちは先生を待ち望んでいた。意外にも、子どもたちは教師になりたい、歌手になりたい、王様に仕えたいといった、村の外に出て働きたいという将来の夢をもっている。そうした生活のなかで主人公が惹（ひ）かれたのが、山々にひびく歌声であった。主人公は、村でいちばん歌がうまいといわれる女性から「ヤクに捧（ささ）げる歌」を学んでいく。

歌声が人と生き物をつなぐ

わたしは、二年前のブータンへの訪問を思い出しながら、この映画を見てとても感動した。まずは、村の子どもたちのキラキラと輝くまなざしである。これは、わたしがティンプーの学校で見たときと似たものがあった。のちに映画に登場した村の子どもたちが、現地の子どもであることを知って驚いた。演技ではなかったのだ。「教師は、未来を教えてくれる人」という村人のことばも印象深い。これほど教師が望まれている村があるのには驚いた。人びとはどこでもあらたな知識に飢えているようにも見える。

次に、町と村との暮らしの違いである。これは、現代の日本でもそうかもしれない。都会の人は村の暮らしを知らない。人類は国をつくって以来、中心部の都市と周辺部の村を生み出した。主人公は、ヤクと人が共存する高地の暮らしを知らなかったが、次第に村の暮らしに適応していく。そして、歌をとおして村の文化を学ぶ過程は人類学のフィールドワークのようにも見える。人と人をつなぐ歌の力を感じさせる。特に「ヤクに捧げる歌」が興味深い。村人は、ヤクを肉や毛皮ではなく、聖なる生き物として見ている。

映画の最後のシーンでは、主人公がシドニーのパブでギターを片手に歌手の仕事をしていた。突然、欧米の歌をやめて「ヤクに捧げる歌」を歌う場面があった。このとき、主人公はこの歌を歌うことでブータン人としての誇りを示したかったのであろう。わたしは、あえて映画の最後に先進国の場面を出すことで、ブータンというヒマラヤの小国の村の文化が現代の都市に生きる若者に影響を与えたこと、自然、文化、文明が共存する世界が生き方の原点として大切であることを示したかったのではないかと考えている。

ことばの迷い道

永遠の愛を誓いますか？

佐田 陸（さた ひとし）
東京外国語大学大学院博士後期課程

世界の諸言語において、「結婚（する）」を意味することばがどのような語源をもつのか、そんなことが気になったのは、何もわたしが結婚のことを真剣に考えるようになったからというわけではない。そうではなく、わたしの専門とする西フリジア語（インド＝ヨーロッパ語族ゲルマン語派西ゲルマン語。英語やドイツ語の姉妹）で、「結婚する」を意味する動詞trouwe（トゥラウェ）が、英語のtrue（トゥルー）と同語源であること、すなわち、「真実」や「信頼」を意味する語に由来することを知り、もしや「真実、信頼」と「結婚」は世界的に見てもつながりが強いのか？などと考えたからだ。

日本語固有の語で「結婚する」を意味する語は、現代日本語でほとんど使わないものもあるが、いくつか存在している。例えば、【約束する】の意味をもつ「契る」、【戸・処を継ぐ】という語構成の「嫁ぐ」、【女を取る】に由来する「娶（めと）る」などである。これらが、諸言語での「結婚」の語源の分類に活かせそうである。

「契る」に近い例として、イタリア語のsposarsi（スポザールスィ）がある。「約束」と「信頼」を近い概念とみなすならば、先に見たtrouweやそれと同語源のドイツ語trauen（トゥラウェン）、オランダ語trouwen（トゥラウェ(ン)）もここに分類できよう。「永遠の愛を約束する」「強い信頼関係を結ぶ」ということが「結婚」の大事な条件となりえたのだろうか。

「嫁ぐ」に近い例として、ドイツ語heiraten（ハイラーテン）【家の調度を調（ととの）える】、スペイン語casarse（カサールセ）【互いに家を成す】、モンゴル語gerlex（ゲルレフ）【家を成す】などが挙げられる。「家を継承する」「あらたな家庭をなす」ということが「結婚する」ということに他ならない、という例といえよう。

「娶る」に近い例として、英語にmarry（マリー）として借用されているフランス語のse marier（スマリエ）【若い女性をえる】、中国語の成婚（チェンフン）【暗い時分に娶りを成す】などが挙げられる。このあたりの語は、もともと「結婚」という行為を男性の目線で考えていたことを示すといえよう。なお、現代においても、ロシア語では「結婚する」の言い方が男女により異なるという。

このほか、英語wed（ウェド）【身代金を払って妻とする】やインドネシア語で動物や虫の「結婚」をあらわすkawin（カウィン）【嫁から婿への持参金】など、「結婚」における風習が反映された語もある。スウェーデン語の「結婚している」という形容詞gift（ギフトゥ）は【与えられた】という過去分詞が元になっている。モンゴル語xurimlax（フリムラフ）【宴会を成す】、ウルドゥー語shādī karnā（シャーディー カルナー）【喜びを成す】、インドネシア語menikah（メニカー）【性交渉を成す】など、置かれる焦点が異なっているものも興味深い。

世界の諸言語における「結婚」を見渡してみると、「誓い」だけが「結婚」に直結するものでもないことがわかる。ただ、わたしはtrouweに隠れた「強い信頼関係の契り」を「結婚」に求めたい。それが、「真実、信頼」と「結婚」の世界的な結びつきを直感してしまった所以だったのかもしれない。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06–6877–8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2021年10月号

第45巻第10号通巻第529号　2021年10月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　齋藤晃　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁ます。

この雑誌は、再生産可能な大豆油由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC FSC® C013678

VEGETABLE OIL INK

月刊みんぱく

2021年
10月号

編集後記

渋沢栄一とその孫、敬三の偉業と功績は、今日のみんぱくの成り立ちに大きなかかわりがある。今号の特集からはそのことを改めて認識した。両氏がもつ幾多の肩書きからだけでも、日本の近代化の根幹に貢献したことは明らかであるが、特に政界にいながらにして学問の発展に直接、間接に寄与したことは意味深い。そこには自分や社会、国を律する確固たる思想があったからこそだと思われる。

ひるがえって、今日の社会を眺めるとき、どんな思想がわれわれを支えているだろうかと問わずにはいられない。身近な例では、コロナ禍を生き抜く思想があってもよい。いやあるべきだと思う。地球全体が多民族社会になりつつあるグローバル化の時代、異質なものを排除するのではなく共存することが求められている。自然界では生物多様性こそが生態系の持続を可能にすることに人類は気が付いた。ウイルスや細菌の分野にも共生の思想をもつ研究がある。コロナとどう向き合うのか、現実的な対策に加えて思想の転換も重要かもしれない。（三島禎子）

次号の予告 11月号

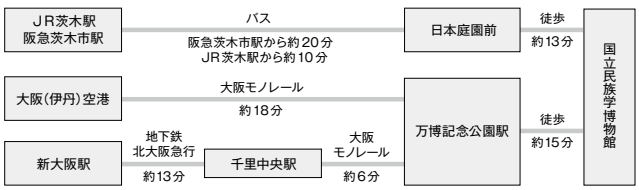
特集「布からみえるインド世界」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/